

高野辰之の文部省唱歌「故郷」の背景

～詩歌・随筆・父母との書簡を通して～

岡田和泉 信州大学大学院教育学研究科研究生

池田京子 信州大学教育学部芸術教育講座

高野辰之, 文部省唱歌, 故郷, 信州, 書簡

1. はじめに

日本人が慣れ親しんできた歌「故郷」は、大正時代に長野県出身の国文学者である高野辰之によって、「尋常小学唱歌」の一つとして作詞されたものである。

「尋常小学唱歌」は、文部省によって1911年(明治44)から発行されたもので、現在では「文部省唱歌」となっている。当時「尋常小学唱歌」は日本における唱歌教育を提唱した伊澤修二の意向に沿って、徳育をその最も大きな目的としており「村の鍛冶屋」「二宮金次郎」「天照大神」など162曲が収められていた。しかし、第二次世界大戦後は軍国主義の教育であるとして墨塗りの対象となった歌も多く、現在まで歌われているものは少ない。このような中、高野辰之の作詞した唱歌である「日の丸の旗」「春が来た」「春の小川」「もみじ」「故郷」「朧月夜」は、現在も小学校音楽において歌唱共通教材として扱われている。また、金田一春彦氏による愛唱歌についてのアンケートでは、幼い頃歌った歌の1位に「ふるさと」、2位に「朧月夜」という結果が報告されている。¹⁾平成元年にNHKが行った「日本のうた ふるさと百選」のアンケートでも、2位に「故郷」、4位に「朧月夜」、そして7位に「春の小川」が選ばれている。²⁾

このように高野辰之の唱歌が100年を超えてなお歌い継がれている背景には、季節の移り変わりや風景の美しさを歌ったものが多いことと同時に、多くの人に共通する思いを歌い上げていることが挙げられよう。静かに目を閉じて「故郷」を聞けば、そこに広がるのは、かつて自分が過ごした田舎の風景であり、父母や兄弟姉妹、幼友達などとの生活である。「故郷」「春の小川」「朧月夜」などの、シンプルだが人々を魅了してやまない辰之の詩は、多くの人々に共通する思いを伝えているからこそ、今日に至るもその輝きを失わないのであろう。

信州に生まれ育った文人、歌人である辰之——人々を魅了してやまない彼の詩の背景を成すもの、すなわちその詩に凝縮された彼の生い立ち、生活、思想、書簡などをひとつひとつひもとくことにより、多くの人々が共感する辰之の詩が生まれたその背景を論じることが、本稿のねらいである。

2. 高野辰之と故郷信州

高野辰之が文部省唱歌に携わることとなった背景について考えるとき、辰之の生まれ育った環境と切り離して考えることはできない。そこで、ここでは高野辰之の生い立ちと経歴について概観する。

高野辰之は明治9年(1876)4月13日に、長野県下水内郡永田村大字永江(現豊田村)に、父仲右衛門、母いしの長男として誕生した。豊田村は長野県の北部に位置する雪深い山里で、辰之の生家はその集落の中にある。辰之の父は、農家の主でありながら学問にも熱心で、当時、著名な陽明学者であった高井鴻山^{たかいこうざん}の私塾に通い教えるほどであった。また、永田村に初めての学校を開校することにも尽力し、子ども達の教育に力を注いだ人物で、このような父の影響で辰之も幼い頃から学問に大変な興味を持ったのである。現在、豊田村にある高野辰之記念館には、辰之が実際使用した教科書やノートが展示されており、墨

で詳しく書きこまれた跡からは、辰之の学問に対する熱心さを見てとることができる。

明治24年(1891)高等小学校を卒業した辰之は、15歳で母校永田小学校の代用教員となる。その2年後の明治26年(1893)、17歳で長野県尋常師範学校(後の長野県師範学校・現信州大学教育学部)へ入学。明治30年(1897)、21歳で卒業し、飯山高等師範学校の教員となる。明治31年(1900)9月に国文学の研究のため上京するが、師範学校時代に奨学金を受けていたため、その返済の代わりとして長野県尋常師範学校の教職に従事せねばならず、1年半後に一度信州へと戻った。しかし、国文学研究の道を捨てきれず、明治35年(1902)26歳で再び上京し、同時に文部省国語教科書編纂委員に任命された。その後は明治41年(1908)32歳で東京音楽学校邦楽調査係、明治42年(1909)33歳で文部省小学校唱歌教科書編纂委員となり、大正6年(1917)41歳まで務めた。

高野辰之は上京して10年ほど経った文部省小学校唱歌教科書編纂委員時代に、文部省尋常小学唱歌を作词している。学問のために故郷を離れ、東京へ出た辰之の詩が「故郷」や「朧月夜」など、故郷への懐かしさを漂わせるものであることは大変興味深い。現在、高野辰之の人間像について知ることができるものに、詩歌・随筆・書簡などが残されている。そこで、次は辰之の詩歌・随筆・父母との書簡をもとに、当時の時代背景を踏まえながら、辰之の故郷に対する想いを推考する。

3. 詩歌・随筆

辰之は、師範学校時代(17~21歳)に詩歌や和歌を学び、卒業の折には恩師や友人に千首近い詩を送っているが¹⁾、その他に詩歌集もあり、詩歌集「故山」には短歌・詩・日記などおよそ90作品が収められている。「故山」の他「春の小川」「花紅葉」など師範学校時代の詩歌集だけでも10あまりが残っており、辰之は師範学校時代から多くの詩歌を詠んでいたと同時に、大変な多作家であったことがわかる。また、これら詩集の題名からは、後に文部省唱歌として作词される「故郷」「春の小川」「もみじ」が連想され、このことから辰之の作词した文部省唱歌の原点は、生まれ育った信州にあったということが出来る。これら詩歌集のうち「故山」は原文を解説したものが豊田村から発行されており、作品を読むことができる。³⁾

次に、明治29年(1896)20歳の頃に書かれた詩集「故山」に収められた詩歌の中から、人生観・父母と故郷に対する想いがよく表れているものを挙げる。

足乳根は／まつそと／しらせ給いけり／文こそなけれ／妹もまつらむ³⁾

上記の詩は「母は息子のことを待っています、と知らせてくださった。手紙こそないが妹も私の帰りを待っていることだろう。」と詠っている。この詩は辰之が長野県尋常師範学校時代(17~21歳頃)に詠んだと思われるものである。

故郷の平和³⁾

一年に一度帰りて父母故旧に見えれば可なり。暑中はよそに過してむ冬に帰らばという人のいぶかしさよ — 中略 — いでおもへかし折々給ふ母の御文を『そこにはかほりなう勉めてとのみ知らずれど告げやらばおもひ悩まんとて例ならぬをもしはでこそあれなきにしもあらざらむ』ああかかる母のみなさげに身も世も忘れぬものやはある。 — 中略 — 如何なる浮枕に逢ふも如何に勞するも如何なるところを流浪するも再び故国にかへりて平和を得ん的一条の希望われも人も有するものなり。誰人も生まれし処に死せんことは誰ひとも希ふ所にして此希望ありてこそ目前の痛苦も暫時は忘るるなれど美に故郷とはかかるものにあらずや。 — 後略 —

上の随筆は長編の一部で、「一年に一度だけ故郷に帰って親に会えばそれでよい、暑いうちはよそで過ごし、冬に帰ればよいなどという人の気持ちがわからない。 — 中略 — 思ってもみよ、折に触れていただく母の手紙のことを。『おまえの手紙には、変わりなくやっています、とだけ書いてあるけれども、母に知らせれば思い悩むだろうと思って、苦勞していることは言ってこないのでしょうか、大変なこともあるでしょう』このような母の御情けに身も世も忘れぬ者などいようか。 — 中略 — どんなに苦勞しようとも、どんな所をさまよおうとも、再び故郷に帰って平和な時を過ごしたい、という希望は、私も他の人も持っているのである。生まれた所で死ぬ、ということは誰もが願うことであり、その希望があるからこそ、目の前の苦しいことも忘れることができる。まさに故郷とはこのようなものであるのではないだろうか」と詠っている。

故郷の虫³⁾

我家は晝も小ぐらき迄茂りたる故杉こすぎの中にあり
 木の下草ひらは拂へども常にしげれり。秋にしなれば干草
 に虫の鳴き出でし物のあはれも一人しおおもひしらるるぞかし
 思へば己が宿に虫のなくよと誠に心づきしは
 物学びにと都に出でし年の夏の休みより
 なりけり。実に物のあはれも此頃よりや知り
 そめにけむ。
 早や帰りてあれぬ故郷の垣根に虫をや聞か
 ましと待ち待ちてかへる。やがて出立んとするに
 名残惜しうて
 ふるさとにきくも今宵ぞ限りなるふりすて難き鈴虫の聲
 音に出ずる汝がはなむけも悲しくて家出苦しきくつわ虫かな
 などよみしも幾とせ上なりけむさるにても祭
 のみまつ頃に今一度ならまほしうこそ

この随筆は、「私の家は昼も暗いほど茂った古い杉の中にある。木の下草は刈ってもいつも茂っていた。秋になれば色々な草の中に虫の鳴き声がするという風流なことも、一層身にしみてよく分かったことだ。思えば私の家に虫が鳴いていると本当に気付いたのは、学問をするために上京した年の夏の休みからであった。本当に、風流というものもこの頃から知ったのだと思う。早く家に帰って故郷の垣根に虫の音を聞きたいと待ち遠しく思って帰った。やがて家を出発しようとするとき、名残惜しく思って故郷で聞くのも今夜で最後だろう。振捨て難い鈴虫の声を。

くつわむしの饞別のような虫の音が悲しく聞こえて、家を出発するのが苦しいことだなあ。などと詠んだのも何年前になるだろう。そうだとしても、祭の日だけを待っていたような頃にもう一度戻りたいものだ」と故郷の秋の風情を思い出し故郷を懐かしんでいるのである。この随筆と内容を同じくする次のような詩も残されている。

今昔³⁾

野もせに生ふる若草も 軒端を去らぬ鳥の音も

のどけきものと 知らざりし 昔にならん術もがな
 垣根に虫も打ちきほひ きぬたの遠くさゆるにも
 あはれの身には志まざりし 昔の身こそ慕われ
 さてはわが家に鳥もなき 虫もなくよと さとりしは
 都に出でて学びしに 夏の休みをはじめにて
 めぐる 月日のうったへに ものは悲しくなりにけり
 昔おもへばうれはしく いまは涙のほかぞなき

これらの作品の他にも、「故山にかへる辞」「母の文」「故山の萩」「懐旧の辞」など故郷を詠ったものが多く収められおり、虫の音・鳥の鳴き声・四季の草花など、故郷の自然を詠んだものが多いことが特徴となっている。

師範学校は長野市内にあり、当時は交通も現在のように発達していなかったため、故郷の永田村から通うことができず、辰之は実家を離れて師範学校に通っていた。また、辰之の実家は村長も務め、小学校の教育にも尽力するような家柄の農家の長男であったため、弟妹に家や両親を任せて家を出て申し訳ないという内容の手紙を残している。また、高野辰之が鳥取出身の作曲家である岡野貞一と共に「故郷」を作る際「これまで子どものために多くの唱歌を作ってきた。故郷を離れて頑張っているのだから、自分たちの志をうたってもいいのではないかと、二人で話し合った」との記述もある。⁴⁾ 同時代の医師で山形出身の野口英世(1876~1928)も19歳で医師免許をとるため上京した際、「志を得らざれば再び此地を踏まず」という言葉を残している。このように当時は故郷を離れて学問をするには志を高く持ち、故郷に錦を飾るまでは帰らないという時代であった。そのような事情からも、これらの作品には父母を尊敬し、故郷を心のよりどころとして学問に励もうとする姿勢が強く表れているのだと考えることができる。

4. 父母との書簡

ここまで高野辰之の詩歌・随筆を取り上げてきたが、次に父母との書簡をもとに当時辰之のおかれていた状況と、そこからうかがえる辰之の心情について考察する。

以下に挙げた書簡は、実家を離れて長野市の長野県尋常師範学校に通っていた、明治28年(1895)19歳の時に書かれたものである。

明治28年6月28日 辰之から父母への書簡 (原文より抜粋)⁵⁾

私こと、不幸にも五月十三日帰宅せしその翌日より、胃かたる病にかかり候、— 中略 — 甚だやせて衰弱いたし候、されど気力は天をも突かん勢いにて、ご心配なきよう、— 後略 —

この書簡には「気力は天をも突かん勢いにてご心配なきよう」と書かれており、辰之の若さが伝わってくるようであるが、父母に心配をかけないようにとの配慮があったことが、同時代に書かれた随筆から知ることができる。

— 前略 — いたづける時しも夜の更けわたりて時計の響きのみさやかに風のさやぎも聞えぬ折ふしは誰か慈しみのつゆ晋き親の御側を恋ひざるものあらむ將た又己がまなこを旅に出しやらんことを誰かは覚束なくおもはざらむ学びの道なればこそ幾重の山を遠く隔てて波風あらし世の海にしも船出せしむるなれ。さるを片時も心許なくおもひ給はでや — 後略 —³⁾

「— 前略 — 病気になり、夜も更けて時計の響きだけがはっきりと聞こえ、風の音もしないような時は、慈しみ深い親の側に居ることを恋しく思わない者などあるだろうか。それに、自分の愛しい子どもを旅に出している事を不安に思わない者など居ようか。学問の道であるからこそ幾つもの山を遠く隔てて、波風の荒い世の海に船出させてくださっているのだ。そのようなことを片時も心配なさらないことなどあるか。 — 後略 —」

この同時代に書かれた書簡と随筆からは、親元を離れ病をして父母や故郷を恋しく思う反面、父母に心配をかけまいと配慮していることが読み取れる。

また、明治31年(1898)9月からの1年半、国文学の研究ため上京していた時期の父母との書簡に次のようなものが残っている。

明治33年2月10日 母から辰之への書簡 (原文のまま)³⁾

拝啓

本月七日付きのお手紙の趣父上を委細聞及候処昨年出京当時の見込より大に異なり家内一同驚愕致し候さて私儀去歳十二月中頃以来病気に候へ共在京勉強の障りと思われ候今回手紙に本年中に帰国のほど覚束なく就ては昨年出発当時の話しには本年三月中帰国のことに承諾の処汝が事心配相増し一層心に残り不得己御知せ申候尚当地は不景気を極め家政上困難を来し為に父上の苦慮の様子は相見受けられ候間何れ本年盆迄に切上え様今日より精々帰郷の予算を取計ふべく此段申上候也

二月十日 高野以志

東京 高野辰之殿

何れ送金は十二 三日頃の事

明治33年2月10日 母から辰之への書簡 (筆者口語訳)

拝啓

今月七日付けの手紙の主旨を父上から細かく聞いたところ、昨年上京した時期の見込みと大幅に異なり、家族一同驚いています。さて、私は昨年の12月中頃より病気をしていたのですが、東京での勉強の妨げになっては、と思いだまっていました。先日届いた手紙では、本年中に帰郷することは難しいとの事でしたが、昨年上京する際には本年の3月には戻るとの約束でしたので、大変心配になり、やむをえず手紙を出しました。こちらは不景気をきわめており、家も苦しいために父上が大変苦労しています。本年のお盆までには切り上げて帰るよう、今日から帰郷の予算を工面してください。

二月十日 高野以志

東京 高野辰之殿

送金は十二 三日頃にいたします

明治33年2月16日 辰之から父への書簡 (原文より抜粋)³⁾

— 前略 — されど靴は破れて形を失し衣は僅かに一重にして垢に染まり洋服あれ共外套なしという始末なれど国に居れば小学校の教師して衣食は出来るものを馬鹿な苦勞して自ら苦しむなりとお笑い下され度候へば私は熱涙を飲みて号泣致す迄にご座候 今更に何も申上げず候 父子の縁なきか如きお手紙私大に覚悟いたし候 人世ここに二十四 若く不幸にして父母の恩を報する

ことなくして其世を去るが如き事あらばと情の強き身は注意いたし居候
 嗚呼永江の村に鋤にぎり居らばこの苦勞はなかりしものをと悲く候事一再ならず候 今更中途に
 して事止むべくもあらず為めに心を奮ひて月日を送り来り候次第生涯の痛苦以何などには随分
 今より考えを勞し居り候 — 後略 —

明治33年2月16日 辰之から父への書簡 (筆者口語訳)

— 前略 — しかしながら靴は破れて形も失い、服は僅か一枚で垢に染まり、外套もないという始末で、故郷にいれば小学校の教師をして衣食には困らないのに、馬鹿な苦勞をして自ら苦勞しんでいる、と笑ってくだされば、私は熱い涙を流して号泣するだけです。今更何も言いません。父子の縁もないようなお手紙も、私は大いに覚悟しております。今、24歳の若さにして、父母の恩に報いることなくこの世を去るようなことがあってはと思っています。(しかし) ああ、永江の村で鋤をにぎってればこの苦勞はなかったのに、と嘆くことは一切できません。今更中途にして学問をやめられるはずもなく、今まで心を奮って月日を送ってきたのですから、(そのための) 一生の苦痛がどのようなものであるかは、今からよく考えております。 — 後略 —

この2通の手紙からは、学問を極めようとする息子を気遣いながらも、家に帰って苦勞する父を助けてやって欲しいと願う母と、学問の道を選ぼうと決心した辰之のやりとりを読み取ることができる。辰之は農家の長男でもあったため、家を出て学問をすることは当時としては大変なことであった。

しかし、辰之がそのような葛藤の中でも、学問の道を選ぶことを予想させる述懐が残っている。この述懐は先ほどの手紙より以前の21歳頃に書かれたものである。

いっわりてと／てあらむ可／偽良傳まとしく／阿羅ん加吾盤／後とら無³⁾
 (偽りて富てあらんか 偽らでまとしくあらんか 吾は後とらん)

この述懐は、自分の志に背いて安楽に暮らすかそれとも志を貫いて苦勞するか、という選択に対して、自分は後者を取りたい、というものである。この述懐からは、辰之が若い時期からすでに志を貫こうとする意志を持っていたことがわかる。そのような息子に対する父の心中が書かれた書簡に次のようなものが残っている。前者は辰之が文部省国語教科書編纂委員として東京に住んでいた明治40年、辰之31歳でいまだ苦學していた時期の書簡であり、後者は大正14年に文学博士の学位を受領し、いわば故郷に錦を飾った際に父から送られたものである。

明治40年3月6日 父から辰之への書簡 (原文より抜粋)⁵⁾

その方は生家相続する義務ある身、昨冬の手紙に三十一歳になると、大丈夫らしく書いてありたれば、青年時代と違い一年もしくは二年に一度くらいは、生家の大事に関することかざなりおるに付き、出来る限り長子の義務として、参与するはよからんと思ひ候へども、そこもよりは学問したる者は馬鹿でなしと書き送る程なれば、学問なき頑固親父は何か言うても、縦横にきりまりする位は、湯一杯呑むほどに思うのやら知れぬのに、とかくわが子は買いかぶるものと人は言うが、親は笑われても先死ぬはず、— 中略 — 父母は死後まで按ずる、馬鹿か情けか父母亡きあと、中老に至りて了解すべし、

明治40年3月6日 父から辰之への書簡（筆者口語訳）

お前は生家を相続する義務がある身だ。昨冬の手紙に三十一歳になると書いてあったが、青年時代と違い一年か二年に一度くらいは生家の重大な事が重なるのであるから、出来る限り長子の義務として関わるのがよいだろうと考えている。しかし、そこはいうまでもなく学問をしている者は馬鹿ではないと（辰之の嫁の実家に）書き送ったが、学が無い頑固親父は仕事をやりこなすことなどは、湯を一杯飲む位に思っているのかもしれない。ともすれば、わが子のことは実力よりも高く評価するものと人は言うが、親は笑われても先に死ぬ道理なのだ。 — 中略 — 父母は死んだ後まで心配するのだ。馬鹿かどうかは父母が死んだ後、歳を取ってから理解しなさい。

大正14年1月13日 父から辰之への書簡（原文のまま）⁵⁾

この度は文学博士の学位受領の吉報に接し、歓喜の至りに候、そこもとは昔から学にこころざし、当初より勉学を怠らず、帝都にのぼり刻苦勉勵の結果この光栄を得たもので、榮譽と同時に家門の榮譽のみならず、郎党の名誉と親族も祝福いたしおり候、しかし末筆に一言す、今後は自らを誇ることなく、益々この道の研究を重ね、邦家のため貢献あらんことを切望す、先ずは学位受領の祝福とす。

父の書簡には、辰之がまだ苦学している時から学問することに理解を示し、文学博士となっても真摯な態度で学問に望めという教えが書かれている。長男としての義務についても触れてはいるが、その義務よりも息子に学問をさせてやりたいという親心が良く表れている。辰之が文学博士の学位を受領した際の父の書簡にある「もとは昔から学にこころざし当初より勉学を怠らず 帝都にのぼり刻苦勉勵の結果この光栄を得たもの」の言葉には辰之の学問に対する態度をよくとらえている。明治・大正期にこのような理解ある父のもとで学問を続けられたことは、辰之にとって父母を敬う気持ちを一層深くしたに違いない。辰之が「故郷」に「いかにいます父母 つつがなしやともがき 雨に風につけても 思いいずる故郷」という詩を書いたのも、このような父母への尊敬があったためということができる。

5. 童話作品

ここまでは、詩歌・随筆・書簡を見てきたが、高野辰之が生涯情熱を注いだ研究分野は、当時はまだ俗文学とみなされていた江戸文学であった。江戸文学とは浄瑠璃・常磐津・江戸長唄・義太夫節・歌舞伎などで、辰之が故郷を離れて東京へ出たいと考えていたのも、それらの研究のためであった。しかし、その頃文学といえば「源氏物語」や「古事記」などの古典を指しており、浄瑠璃や歌舞伎などの江戸文学は研究の対象とはみなされていなかったのである。辰之はそれらの作品を作者別や年代別にまとめ、日本人の精神的背景から作品の価値について述べることによって、日本の芸能を学術的に系統だて、国文学の新たな分野として切り開いていったのである。辰之が浄瑠璃や歌舞伎をはじめとする江戸文学の価値を見出し、熱心に研究したのは、それらの作品に古くからの日本人の精神を見出していたためである。

辰之は、国文学に古くからの日本人の精神を見出し、またその一方で、文部省国語教科書編纂委員として新しい国語教科書の編纂にも携わっていたのであるが、当時、子どものための読み物は「尋常小学校読本」が文部省から発行されていただけであった。「その国の童話にはその国の思想がこもっている」⁶⁾と考えていた辰之は全国の小学校に依頼して子ども向けの童話を探し出し、それらを再度書き直したものを「家庭お伽話」としておよそ70編を出版したのである。辰之の手がけた童話において注目すべき点は、親に対する尊敬や孝行といったものをテーマとしたものが多いということである。このように辰之の出版した童

話作品からは、辰之自身の思想を知ることができるのである。

それらの作品の中で「鬼の面」「たにしの嫁様」「鴨捕権兵衛」等は今日も読むことができる。その内容を見てみると、「鬼の面」は貧しい暮らしの孝行娘が幸せになるというものである。母親を残して奉公に出た娘が、母の変わりに持っていた面を、ある日丁稚のいたずらによって鬼の面にすりかえられてしまう。そんな事とは知らずに鬼の面を見て驚いた娘は、母の身に何かあったのではと急いで故郷へ帰ろうとする。その途中山賊に捕まってしまうが、鬼の面をつけた娘を見た山賊たちが逃げ出し、娘は財宝を手に入れて母と幸せに暮らした。というものである。「たにしの嫁様」は、子どもの無い夫婦が願掛けをしたところ、たにしの息子を授かる。働き者に成長したたにしはある日長者の娘に一目ぼれし、長者も3人の美しい姉妹のうち誰か一人を嫁にやろうと考える。しかし上の2人の姉は、「たにしの嫁などんでもない」と親の願いを退けるが、心やさしい末娘が「父上のおっしゃることなら」と言ってたにしの嫁になった。するとたにしは立派な若者になり、またたくまに屋敷や金銀があふれ出た。という話である。「鴨捕権兵衛」は現在も良く知られているように、勤勉に働かないと結局はなにも身に付かないという教訓を含んだ話である。

どの童話も、親を大切にすることで幸せになる、勤勉で正直に生きる、といったことが分かりやすい筋で書かれている。これらを当時の子ども達に読ませようとしたことは、辰之のこのことを知る上でも重要であり、これら童話の示す教訓はそのまま辰之の生き方を示しているものとして大変興味深い。

6. 高野辰之の文部省唱歌「故郷」の背景

上述のように、高野辰之の詩歌や書簡からは、父母を尊敬し、故郷に思いを馳せながら志を果たしていた姿を読み取る事ができる。そしてそのような姿勢は、師範学校時代の17~21歳という青年期にすでに表れていたことも今回指摘した。辰之がこのような生き方を貫いたことには、学問熱心で農家でありながら教育に力を注いだ父母に育てられたことが大きく関係していると考えられる。特に自ら陽明学者の私塾に通い、村に初めての学校を開校し、家計が苦しい折にも辰之の学門に対する理解を示した父親の影響が大きかったと言う事ができよう。

「尋常小学唱歌」が作成された当時は、日本の唱歌教育においては、徳育をその最も大きな目的としていた。また、当時は文部省の事業という事で、多額の報酬と引き換えに唱歌の作詞者・作曲者は伏せられ、作者の家族でさえも知らされていなかった。戦後著作権法の改正により、少しずつその作者が明らかになってきているが、現在では「尋常小学唱歌」162曲のうち、その多くは歌われなくなっている。そのような中であっても、高野辰之の唱歌「故郷」が広く歌われているのは、この詞に辰之の生き方そのものが表れていると共に、日本人が心に描く故郷の原風景が詠われているからだといえよう。

国家を主体とした徳育でなく、高野辰之自身の志に従った生き方を、美しい信州の自然とともに詠っているからこそ、高野辰之の文部省唱歌「故郷」は、今日に至るまで歌い継がれているということができよう。

引用文献

- 1) 芳賀綾監修「定本 高野辰之 その生涯と全業績」 株式会社郷土出版社 p60・p39
- 2) 吉本隆行監修「信州ふるさとの歌」 長野県商工会婦人部連合会編 銀河書房 p14
- 3) 「高野辰之の青春の想い―師範学校当時の詩集より―」 長野県下水内郡豊田村発行 p18・26・31・42・27・91・90・92
- 4) 三田英淋「菜の花畑に入り日薄れ」 理論社 p133
- 5) 畑守人「物語 高野辰之」 ほおずき書房 p20・57・74
- 6) 長野県下高井郡野沢温泉村おぼろ月夜の館資料

参考文献

- 1) 「高野辰之の青春の想い―師範学校当時の詩集より―」 長野県下水内郡豊田村発行
- 2) 團伊玖磨「日本人と西洋音楽」 日本放送出版協会
- 3) 村制試行四十周年記念「高野辰之作詞全国校歌集」 長野県下水内郡豊田村発行
- 4) 「ふるさと草子 高野辰之と野沢温泉」 長野県下高井郡野沢温泉村発行
- 5) 野村幸治・中山裕一郎「音楽教育を読む」 音楽之友社
- 6) 「新訂 尋常小学唱歌第一學年用」～「新訂 尋常小学唱歌第六學年用」 文部省 日本学舎
- 7) 高野辰之作・高野正巳訳「鬼の面」 銀河書房
- 8) 高野辰之作・高野正巳訳「たにしの嫁様」 銀河書房
- 9) 高野辰之作・高野正巳訳「瓜姫」 銀河書房
- 10) 池田京子「ころごしをはたして～高野辰之と唱歌に詠われたふるさと信州～」 信濃教育会「信濃教育」第1404号

(2004年3月26日 受理)